

# 直説法の主節と仮定法の従属節の組み合わせにおける 時制の不一致に対する認知的配慮の効果

## The Effects of the Cognitive Considerations for the Tense Disagreement Between the Main Clause in the Indicative Mood and the Subordinate Clause in the Subjunctive Mood

永井 誠<sup>1)</sup>

Makoto Nagai<sup>1)</sup>

**Abstract** : This study reports the effects of the cognitive considerations for the instruction of the subjunctive mood proposed in NAGAI (2019). It discussed why and how it is difficult for the Japanese EFL learners to acquire [ as if ] and [ wish ] structures, and proposed four specific cognitive considerations to improve the acquisition.

The effects were confirmed after the five-month period of the experimental lessons, where the control group was taught in the conventional way and the experimental group was taught with the cognitive considerations. Since the score of the subjunctive test of the experimental group was higher and there was a statistically significant difference between the scores of the two groups, it can be concluded that the considerations can contribute to the learners' acquisition of the subjunctive mood.

**Keywords** : Subjunctive Mood, Tense Disagreement, Clauses in Different Moods

### 1. 本研究の背景と目的

仮定法は一般的に、日本人学習者にとって習得困難な文法項目の一つと考えられる。いくつかの先行研究がその困難さの原因を検討し、「仮定法」という日本語の用語の問題、時制に基づいた各用法の名称が非体系的で（形式に基づく名称と表す意味に基づく名称が混在するなど）学習者の混乱を招くこと、名称の時制と実際に表す時制が異なることなどがその原因として挙げられている（伊藤 2002, 城戸 2000, 永井 2001, 野村 2007）。

NAGAI(2019)はこれらに加えて、[ 主語 wish 従属節 ]（以下「wish 文」）や[ 主節 as if 従属節 ]（以下「as if 文」）の扱いが原因で、時制の一致／不一致のルール全体が学習者にとって非体系的に見えることを挙げ、それに対する認知的配慮を提示することによって仮定法全体の習得を促進することを提案した。本研究は実験的授業の結果に基づいてその認知配慮の効果を確認するものである。

### 2. NAGAI (2019) の概要

If で始まる典型的な仮定法の文（以下「if 文」）の場合、主節と従属節の間には時制の一致が適用される。

Ex.1 If I were free now, I could help you. (仮定法過去)

Ex.2 If I had been free at that time, I could have helped you. (仮定法過去完了)

主節を変えて従属節をそのままにした以下のような文は非文とされる。

Ex.3 \*If I were free now, I could have helped you.  
(仮定法過去)

Ex.4 \*If I had been free at that time, I could help you.  
(仮定法過去完了)

一方、多くの場合「仮定法過去」「仮定法過去完了」に加えて「仮定法のその他の用法」や「仮定法が～の場合」として提示される wish 文や as if 文では、主節と従属節の間に時制の一致が適用されない。

Ex.5 John talks as if he were the chairman.  
(仮定法過去)

Ex.6 John talked as if he had been the chairman.  
(仮定法過去完了)

主節を変えて従属節をそのままにした次の二文は適格文として成立することから、時制の一致が適用されないことが分かる。

<sup>1)</sup>東京都立産業技術高等専門学校 ものづくり工学科、一般科目

Ex.7 John talked as if he were the chairman.

(仮定法過去)

Ex.8 John talks as if he had been the chairman.

(仮定法過去完了)

「仮定法」として一括りで扱われるこれらの用法に関して、時制の一致が if 文では適用され、wish 文や as if 文では適用されないという説明がどれだけなされているか（あるいはなされていないか）について、高等学校用検定教科書「English Communication」「English Expression」それぞれ 10 タイトル（合計 20 タイトル）を調査した。その結果、説明がなされていたのは、それぞれ 10 タイトル中 1 タイトルであり、一般的には説明されていないと言って差し支えないことが判明した。

このことは、仮定法（及びそれを含む）表現の時制に関するルールが体系的に示されていないということの意味し、学習者を混乱させ、仮定法全体の習得を妨げている可能性があると考え、それを解消する認知的配慮として以下の 4 つの提案をした。

#### (1) 章立て：「直説法と仮定法の組み合わせ」

「仮定法過去」「仮定法過去完了」として if 文の説明をした後、新たな章で「直説法と仮定法の組み合わせ（あるいは「ミックス」）」として wish 文や as if 文を提示する。そして、主節は直説法（つまり現実）であることを明記し、if 文とは違いがあることを認識させる。（前述の調査結果では、wish 文や as if 文に関して「直説法」という用語を使っているものは 20 タイトル中ゼロであった。）

#### (2) 時制の不一致とその理由

wish 文や as if 文では主節（直説法）と従属節（仮定法）の間に時制の一致が適用されないことを明記し、学習者が納得しやすい（直感的に理解しやすい）理由を提供する。そのような理由付けの候補として「現実と非現実の間に時制の一致はない」という説明法を挙げた。

#### (3) 従属節の時制の選択

wish 文や as if 文の従属節でどのような時制が使われるかに関しては、主節の時制には関係なく、主節に対して「リアルタイム仮想には過去形」「事前仮想には過去完了形」と説明する。（この点は「English Communication」では 10 タイトル中 1 タイトル、「English Expression」では 10 タイトル中 3 タイトルで説明されていた。）なおこの点に関しては、一部の文法書において以下のように、正確とは言い難い記述も見られる（一部語句を改変）。

<I wish +仮定法>は実現しそうにない【実現できなかった】願望を表す。現在の願望には仮定法過去を使い、過去の願望には仮定法過去完了を使う。

この説明が wish 文の説明として正確とは言い難いのは、以下のように仮定法過去で過去の願望も表せるし、仮定法過去完了で現在あるいは未来（不特定の時）の願望も表せるからである（as if 文の従属節も同様）。

Ex.9 At that time, I wished I were single.

(過去形で過去の願望)

Ex.10 One day you will wish you had taken my advice.

(過去完了形で不特定の時の願望)

#### (4) 最低限必要な例文の数

時制の不一致を体系的に理解させるには、例文は最低限 4 文必要である。以下の 4 つの組み合わせがあるからである（以下は as if 文の例.wish 文も同様）。

1. 現在形の主節＋過去形の従属節（現在において現在に関する仮想を述べる場合）

Ex.9 John acts as if he were the captain.

2. 過去形の主節＋過去形の従属節（過去においてその時点に関する仮想を述べる場合）

Ex.10 John acted as if he were the captain.

3. 現在形の主節＋過去完了形の主節（現在において過去に関する仮想を述べる場合）

Ex.11 John acts as if he had been the captain.

4. 過去形の主節＋過去完了形の従属節（過去においてそれ以前の事柄に関する仮想を述べる場合）

Ex.12 John acted as if he had been the captain.

例文の数が多くなるが、仮定法全体の体系的な理解には必要なことであると思われる。

## 3. 本研究

### 3.1 方法

NAGAI(2019)で提示された認知的配慮（4つの提案）の効果を検証するため、東京都立産業技術高等専門学校荒川キャンパスの 3 年生を対象に実験授業を行った。統制群と実験群を設定し、統制群には一般的な検定教科書や文法参考書の通りに、実験群には認知的配慮を加えて授業を行い、その効果を比較した。（資料にそれぞれの教材を示す。）

### 3.1 実験グループの設定

統制群と実験群は、2 クラスの学生が同年度に受けた TOEIC スコアを元に、成績をカウントする成員を調整して

(それぞれ上位群または下位群を数名減らして), 同程度の成績の 2 グループとなるよう設定した。調整した 2 グループの TOEIC スコアを表 1 に示す。有意水準 5% の両側 t 検定の結果,  $p=0.99$  であり両群に統計的に有意な差はないと言って差し支えないと思われる。

表 1: TOEIC スコアの比較

	n	Mean	SD
統制群	25	363.6	63.65
実験群	24	363.75	48.80

$p=0.99 > 0.05$

### 3.3 実験授業

仮定法自体 (最初の提示) は前年度の後期に検定教科書通りに扱っているが, 「文法復習」として 7 月から 11 月にかけて 2 つのグループに対して異なる教材を用いた実験授業を行った。(統制群の教材を資料 1, 実験群の教材を資料 2 として後に示す)。実験群の教材は認知的配慮 (4 つの提案の内容) を盛り込んだものである。7 月に 45 分ほどの時間をかけて教材プリントの内容を説明し, 夏期休業中の課題の一部として主節・従属節の時制を選ぶ問題を 7 題 (if 文×3 + wish 文×2 + as if 文×2) を課し, 休み明けに 30 分ほどでその解答・解説を行った。やや時間を空け, 11 月の授業中に 45 分ほどかけて再解説・再復習をした (同様の 7 種の問題を使用)。

実験授業の練習問題では, 日本文を元に英文の主節・従属節の形 (時制) を選ぶ問題を扱った。if 文の扱いは統制群・実験群共通とし, 仮定法過去・仮定法過去完了それぞれにおいて主節・従属節にどの時制が使われるかを解説し, 練習させた。if 文と as if 文に関しては, 「リアルタイム仮想」「事前仮想」の部分の説明は共通とした上で, 統制群/実験群の練習問題を以下のように差別化した。

統制群では wish 文と as if 文それぞれに関して, [現在形の主節+過去形の従属節], [過去形の主節+過去完了形の従属節] の文を作る問題とし, 計 4 題練習させた (日本文省略)。11 月の再復習に用いた文を以下に示す。

I wish I were a little younger.

(現在形+過去形)

When I saw the news, I wished I had been to Shuri Castle.

(過去形+過去完了形)

The president talks as if he had a private jet.

(現在形+過去形)

John talked as if he had been to Iran many times.

(過去形+過去完了形)

これら二つの組み合わせは, 以下の例のように検定教科書でよく見られるものであるが, 学習者にとっては時制の一致が適用されているように見える可能性があると思われる (検定教科書の例文を一部改変)。

His painting looks as if it were a real photo.

(現在形+過去形)

I felt as if I had seen the picture before.

(過去形+過去完了形)

実験群の練習問題では, 時制の一致があると誤解させないために [過去形の主節+過去完了形の従属節] の組み合わせを避けて, [過去形の主節+過去形の従属節], [現在形の主節+過去完了形の従属節] の問題を二組練習させた。また, 練習後の解説で時制の一致がないこととその理由を再度述べた (現実/非現実)。

At that time, I wished I had a car.

(過去形+過去形)

I wish I had taken the TOEIC test more seriously.

(現在形+過去完了形)

The boy talked as if he could drive.

(過去形+過去形)

You talk as if I had told you a lie.

(現在形+過去完了形)

## 4. 効果比較テストの結果

実験授業の効果比較は, 11 月の復習からさらに時間を空けた 2 月の定期試験の一部として行った。この間, 両群の学生は過去の (異なる) 教材プリントに基づいて各自復習をしていた。なお, 文法項目一つのために多数の問題を設けるわけには行かないため, 問題数 6 問 (解答箇所 8 カ所) とした。定期試験の中の該当箇所を以下に示す。

XI. 日本文の意味を表す英文になるように, ( ) 内の適切な語形を選びなさい。

(1) 僕が学生だったらもっと一生懸命数学を勉強するのにな。

If I ( am / were / have been / had been ) a student, I ( studied / will study / would study / would have studied ) math harder.

(2) 火事の前に首里城に行っていればすごく楽しかっただろうにね。

If we ( visit / visited / have visited / had visited ) Shuri Castle before the fire, we ( had / will have / would have / would have had ) a great time.

(3) 今ここに John が僕らと一緒にいてくれたらなあ。

I wish John ( is / were / has been / had been ) here with us.

(4) その時私は、自分が英語のネイティブだったらなあと思いました。

At that time, I wished I ( am / were / have been / had been ) a native speaker of English.

(5) 君はまるでずっと病気だったような顔をしているね。

You look as if you ( are / were / have been / had been ) sick for a long time.

(6) John はまるで以前から僕の友人であったかのように話しかけてきたんです。

John talked to me as if he ( is / were / has been / had been ) a friend of mine.

両群の成績とその比較を表 2 に示す。平均として示した成績の数値は 8 つの解答箇所の正答率(%)である。なお、if 文を含めた 8 カ所としたのは、wish 文や as if 文における時制の不一致の理解が仮定法全体の習得に影響するという仮説のためである。

表 2：効果比較テストの結果

	n	Mean	SD
統制群	25	52.5	25.77
実験群	24	68.23	22.72

$p \approx 0.03 < 0.05$

結果は、統制群 52.5%に対して実験群 68.23%と実験群が優位で、有意水準 5%の両側 t 検定の結果  $p \approx 0.03$  であり、両者の成績の間には統計的に有意な差が認められた。

## 5. 結論

日本人学習者にとって仮定法が習得困難である原因として、先行研究で様々な要因が提案されている通り、原因は一つではないと思われる。しかしながら本研究の結果から、時制の一致に関するルールが if 文と wish 文や as if 文では異なるということを学習者に認識させることは、様々な文 (if 文を含む) それぞれの主節・従属節でどのような形式 (時制) を用いるべきかを学習者が体系的に理解し、習得することを促進する可能性があるということが言えると思われる。今後は様々な要因の関係、それぞれの解消法、解消すべき優先順位の研究や、さらには他の新たな要因の発見が課題となるであろう。

## 参考文献

- [1] M. Nagai : Cognitive Considerations for the Tense Disagreement Between the Main Clause in the Indicative Mood and the Subordinate Clause in the

Subjunctive Mood. 東京都立産業技術高等専門学校研究報告, 13, pp.47-52, 2019

- [2] 伊藤裕道：『仮定法』の英文法教育史 - 文法事項の史的検討(5) - 『日本英語教育史研究』, 17, pp.41-75, 2002
- [3] 城戸法政：仮定法学習の一指針『千葉敬愛短期大学紀要』, 22, pp.21-32, 2000
- [4] 永井誠：認知的アプローチによる仮定法教授法の効果『ARELE : Annual Review of English Language Education in Japan.』, 12, pp.21-29, 2001
- [5] 野村忠央：英語教育における仮定法教育の問題点 (特集プロジェクト 言語化学と英語教育研究会 英語教育とコーパス ワークショップ&シンポジウム) -- (言語理論と英語教育, そしてコーパスの融合を目指して) 『立命館言語文化研究』, 18, (4), pp.79-94, 2007

## 資料1：統制群の授業に使用した教材

### 文法復習：「仮定法」

「仮定法」は、事実に反する仮定をおこなったり、現実には実現しそうなことを願望したりするときに使われる。それに対して、事実や現実に基づく「普通」の言い方は、「直説法」という。

「仮定法＝仮想 vs. 直説法＝現実」と考えると良い。

1. 仮定法過去 現在の事実と反対のことを仮定する。

(1) ifを使う基本形 「もし（今）～だったら、---だろうに／---できるのに..」

条件節（if節）の述語は過去形、主節の述語は助動詞の過去形（would, could, might..）＋動詞の原形

If I knew John's number, I would call him. 「Johnの番号を知っていたら電話するのに..」

If we had a time machine, we could see our future. 「タイムマシンがあつたら僕らの未来が見られるのにね..」

(2) ifを使わない例①: wishの後「～だったらいいのに」

発話時点と同時点に関する非現実的願望には wishの後に過去形を使う。

I wish John were with us. 「Johnが一緒だったらいいのに..」

I wish I had more time. 「もっと時間があつたらいいのに..」

(3) ifを使わない例②: as ifの後「まるで～かのように」

主節と同時点に関する非現実的仮定には as ifの後に過去形を使う。

You talk as if you knew everything. 「君はまるで何でも知っているかのような口ぶりだね..」

John is crying as if he were a little baby. 「Johnはまるで赤ん坊のように泣いています..」

2. 仮定法過去完了 過去の事実と反対のことを仮定する。

(1) ifを使う基本形 「もし（その時）～していたら、---だっただろうに／---できただろうに..」

条件節（if節）の述語は過去完了形、主節の述語は助動詞の過去形（would, could, might..）＋動詞の完了形

If I had had more money, I would have bought a better computer. 「もっとお金があつたらもっと良いコンピューターを買っていただろうに..」

If you had studied harder, you could have passed the test. 「もっと一生懸命勉強してたら君はテストに受かることができただろうに..」

(2) ifを使わない例①: wishの後

発話時点以前の事柄に関する非現実的願望には wishの後に過去完了形を使う。

I wished I had been here earlier. 「もっと早くここに来ておけば良かったと思いました..」

I wished you had told me the truth. 「君が本当のことを言ってくれていたらと思ったよ..」

(3) ifを使わない例②: as ifの後

主節の時点以前の事柄に関する非現実的仮定には as ifの後に過去完了形を使う。

John talked as if he had visited China. 「Johnは中国に行ったことがあるかのような口ぶりでした..」

The girl looked as if she had seen a ghost. 「その子はまるで幽霊を見たかのような様子だった..」

## 資料 2 : 実験群の授業に使用した教材 (一部強調)

### 文法復習: 「仮定法」

「仮定法」は、事実と反する仮定をおこなったり、現実には実現しそうなことを願望したりするときに使われる。それに対して、事実や現実に基づく「普通」の言い方は、「直説法」という。

「仮定法=仮想 vs. 直説法=現実」と考えると良い。

#### 1. 仮定法過去

ifを使う基本形 「もし(今) ~だったら、---だろうに/---できるのに..」

条件節 (if 節) の述語は過去形、主節の述語は助動詞の過去形 (would, could, might..) + 動詞の原形

If I knew John's number, I would call him. 「John の番号を知っていたら電話するのに。」

If we had a time machine, we could see our future. 「タイムマシンがあったら僕らの未来が見られるのにな。」

#### 2. 仮定法過去完了

ifを使う基本形 「もし(その時) ~していたら、---だっただろうに/---できただろうに..」

条件節 (if 節) の述語は過去完了形、主節の述語は助動詞の過去形 (would, could, might..) + 動詞の完了形

If I had had more money, I would have bought a better computer. 「もっとお金があったらもっと良いコンピューターを買っていたら。」

If you had studied harder, you could have passed the test. 「もっと一生懸命勉強してたら君はテストに受かることができたら。」

#### 3. 直説法と仮定法のミックス (直説法の中の仮定法)

主節は直説法による現実の行動で、それに続く従属節 (内容) は仮定法による仮想の話

→ 「**現実**」と「**仮想**」のミックス。※この両者の間に「**時制の一致**」は適用されない。

(1) 主語 + wish (直説法) の後に仮定法 「~だったらいいのに」

→ 願っている/いたのは「現実」で、その内容は「仮想」

① 発話と同時点に関する非現実的願望には wish の後に過去形を使う。

I wish John were with us. 「John が一緒だったらいいのに (と思う) .」

I wished John were with us. 「John が一緒だったらいいのに (と思った) .」

② 発話の時点以前の事柄に関する非現実的願望には wish の後に過去完了形を使う。

I wish I had taken your advice. 「君の忠告を聞いておけば良かったと思うよ。」

I wished I had taken your advice. 「君の忠告を聞いておけば良かったと思ったよ。」

(2) 主語 + talk, act, look など (直説法) + as if の後に仮定法の「まるで~かのように」

→ 話したり、振る舞ったりする/したのは「現実」で、その様子が「仮想」的な場合。

① 主節と同時点に関する非現実的仮定には as if の後に過去形を使う。

John acts as if he were the captain. 「John はまるで主将であるかのような振る舞いをする。」

John acted as if he were the captain. 「John はまるで主将であるかのような振る舞いをした。」

② 主節の時点以前の事柄に関する非現実的仮定には as if の後に過去完了形を使う。

The girl looks as if she had seen a ghost. 「その子はまるで幽霊を見たかのような様子だ。」

The girl looked as if she had seen a ghost. 「その子はまるで幽霊を見たかのような様子だった。」